

2. 品質管理①

事故やトラブルの未然防止技術

3H(さんえいち)

1. 3Hとは

3Hとは、初めて(Hajimete)、変更(Henkou)、久しぶり(Hisashiburi)の頭文字である。3Hは安全管理のポイントをよく表した標語として、昔から言い伝えられている。私たちは経験則として、事故やトラブルは3H(初めて、変更、久しぶり)の折に起き、定常時には極めて少ないことを理解している。3H活動とは、これに着目し、反省の3Hから、計画の3Hに考え方を切り替えて、事前に3Hの視点で課題を“気づき”、問題が発生しないように、確認しながら仕事を遂行する仕組みで事故やトラブルを防ぐ未然防止技術である。

2. 3Hを必要とする背景

社会の高度化やビジネスのスピードアップなどに伴い、事故やトラブルの影響はますます深刻さを増している。事故やトラブル発生の場合には、その再発防止(是正処置)は必須であるが、大きな経済的負担や人身事故を経て行う再発防止ではなく、未然防止(予防処置)がますます重要になっている。しかし、未然防止の方法にはいろいろあるが、その多くは難解で一般の人にはなじみ難く、さらに実行には膨大な人的エネルギーを要することもよく知られている。そこで3Hを推奨したい。

3Hは簡単に親しみやすい未然防止技術で、誰でもいつでもどこでも参加できる。始めるには自分のできることから取り組めばよく、特別な技術も投資もいらぬ。さらに全員参加の全社活動に発展すると効果は絶大である。

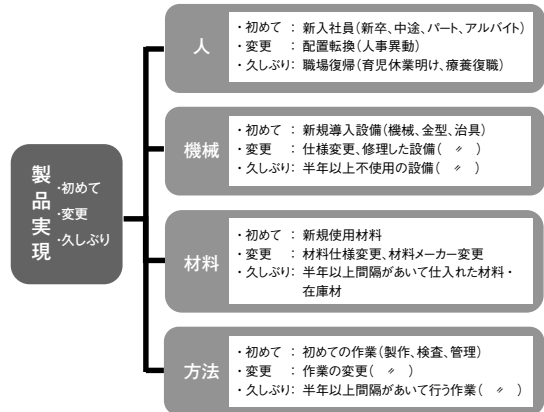
3. 有効活用のポイント

3Hの基本は、仕事に着手する前に3Hの視点でいかに気づき、着眼するか、そして、仕事のなかで確実に確認・実行するかに尽きる。

モノづくりを例にした3H体系図を図1に示す。モノづくりでは「製品実現」が最上位に来る。製品実現には設計、製造、物流などのプロセスがあ

り、これらを4M(作業員、機械、使用材料、作業方法)の視点で、さらに3H(①初めて、②変更、③久しぶり)の視点で目を向けていくとよい。

図1 モノづくりを例にした3H体系図



次に業務フローに沿った3H実施要領を作成してルールとして定める。基本は2つで、まず業務フローに沿って次々と進む仕事に対しての課題について、

①だれが、②いつ、③どうするか、を決める。そして、一日、一カ月のなかで時系列に課題について、①だれが、②いつ、③どうするか、を決める。

例えば、部門長は月末に実行された3Hの、すべての「歯止め」の実行点検、「歯止め」のルール化の点検、ルールの見直しをして、3H活動報告をするなどである。

3Hは、日常業務の徹底、そして5S(整理、整頓、清掃、清潔、躰)の充実や総合的品質管理(TQM)などと並行実施をすれば大きな相乗効果が得られる。そして、品質不良ゼロ、納期遅延ゼロ、労働災害ゼロの実現に迫ることができる。

4. 「現場力ダントツ化」のポイント

3Hのさらなる発展は、当事者・関係者の人間的な成長にかかっている。4Mの視点にMarket(市場)、Money(資金)、Management(管理)を追加し7Mにすることで全社活動へと広げることや、BS(ブレイン・ストーミング)を随所で実行し、先入観にとらわれない「気づきの知」を発掘して、常に目的を確認し、誰のためにやるのかを謙虚に見直しながら関係者の尽力に報いて行く姿勢が大事である。

(今野 瑞嘉)